

(続紙 1)

京都大学	博士（ 教育学 ）	氏名	塩原佳典
論文題目	地域名望家層と近代学校—幕末維新时期における地域秩序の解体と再編—		
(論文内容の要旨)			
本論文は、幕末維新の変革期に、地域名望家層が近代学校設立に関わった様態を、他の開化事業との関連を視野に入れつつ考察した研究である。その際の分析視点として、地域名望家層の有した「媒介者の素養」に着目する。この「媒介者の素養」とは、地域社会の外部と内部の境界に位置し、内外を行き交う知や情報を取捨選択、加工して内部へ具体化して取り次ぐ力量のことで、それが地域で優位的地位を維持する力の源泉といえる。この視点の確保により、村役人や地域文化人等、活動領域を異にする多様な地域名望家たちを串刺しに論じることが可能となった。 地域を取り巻く大状況（外部）が変容する幕末維新时期は、地域秩序の解体・再編期でもあった。新政府が打ち出す近代化政策は、地域社会に多様な「開化」を迫ってきた。それこそ、地域名望家層が培ってきた媒介者の素養が鋭く試される瞬間に他ならない。外部から迫る「開化」を握り統制する媒介者の素養は、地域社会の現実を新たに創り出す力の源泉であった。近代学校設立は、地域名望家層が、自らの生き残りを賭けて取り組む主要な開化事業とみられたのは、必然であった。 近世史と近代史の「断層」が依然として指摘されることを反映して、近世から近代への移行に関する教育史の理解も、「身分というくびき」から「国家というくびき」へという図式提示にとどまっている。これに対し本論文は、当該期の地域社会を主導した地域名望家層の視点から、この移行過程のリアリティをとらえ直すことを主題に据えた。身分的出自とそれに伴う媒介者の素養を異にする地域名望家たちが展開した幅広い活動を同時に見通しつつ、維新変革に対応するなかで彼らが模索していた近代学校の位置と意味をあぶり出すことを本論文は目的としている。 序章では、地域教育史や名望家研究、教育のメディア史の先行研究を検討し、その到達点と問題点を指摘するとともに、本論文の課題と方法を示した。対象を「村」の集合体としての「地域」、具体的には信濃国中南部（松本藩のち筑摩県のち長野県）に定め、視点を多様な名望家層に据えその方法論的立場を明確にした。 第一章では、維新以降の名望家たちの媒介者の素養が、近世後期に培われてきた様態を、とくに村役人層が、村と自らの「由緒」を網、祭礼や外部からの来訪者や情報統制することで、地域秩序を維持・再生産してきた事実によって解明した。 第二章では、維新変革にともなう家や身分、人の関係性の流動のなかで、開化の担い手が生成する過程を検討した。すなわち大庄屋の本家出身の栗林球三、大庄屋分家出身の藤森寿平、町方名主兼商人出身の市川量造が個々の媒介者の素養をもとに、筑摩県の「開化」に対応していく過程を検討し、身分的な出自と力量を異にするものたちが「開化」の主導権を奪い合う状況を解明した。			

(続紙 2)

第三章では、市川量造のように学校・新聞・博覧会など多様な事業に同時に関わった兼任者たちに着目した。その際、これらの諸事業を「開化のメディア」と見立て相互の連関性に留意した。創設期の学校は、新聞・博覧会と重なる地域開化のメディアであり、かつ両事業に伝達される情報でもあった。他方、3事業の連携には綻びも存在していたが、それが近代学校の特質を明確化する契機と評価した。四章では地域の博覧会に着目し、地域名望家たちが「開化」の意味を加工して媒介する過程を検討した。開化期の地方博覧会は、古器物や村芝居も取り込み、近世的なものの切り捨てより、活用再編して「開化」受容を進めたものと評価した。

明治10年代を扱った第五章では、名望家たちが主体的に模索した近代学校設立構想が民権運動を分岐点にそれぞれ独自に展開した様態を解明した。民権家藤森は政治運動と連関した近代学校のあり方を模索し、大庄屋出身の栗林は地域の殖産拠点たる職業学校の設立を目指した。いずれも自らが当面する現実根ざした近代学校への模索であったと評価した。

補論では、栗林らの一世代後の民権家松沢求策を取り上げ、媒介者の素養の変容を検討した。松沢は、小説・村芝居・新聞などの多様なメディアを活用して、近世の義民伝承の語り直しを通じて、民権思想を地域社会へ媒介し、政治的な主体形成を果たしていった。松沢が長野県を代表する民権運動家となるうえでも、この媒介者の素養が重要な意味を持っていたことを示した。

終章では、行論から浮かび上がらせた地域秩序の解体・再編過程と、そのなかでの近代学校の姿について整理した。第一に、地域名望家たちが近代社会の担い手へと転身する経路としての近代学校の姿である。維新変革期の地域変容のなかで、誰がいに学校設立へ関与するかは、単に教育の理念や制度の次元だけで把握しうる問題ではなく、近代社会に生き残りを賭けた切実な問題と密接に絡み合っていた。第二に、次世代育成の拠点として模索されていた近代学校の姿である。市川量造が目指した「開化のメディア」の一環としての近代学校、藤森寿平が模索した新たな国家を担う政治的主体を育成する教育、栗林球三が求めた地域に即した殖産の実現を目指した職業学校。3者はそれぞれの立場と自らのもつ媒介者の素養から、近代学校の構想を立ち上げていた。それらは、ただ「中央」へ一方向的に人材を供給するのではなく、地域に根ざし地域に貢献しうる人材育成のための近代学校の姿である。媒介者の素養という分析概念により、多様な地域名望家たちの近代学校作りの模索の様態を一定のリアリティを以て浮かび上がらせたことは、従来の地域教育史の枠組みを批判的に塗り替える有効性を示していると結論づけた。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

明治初期、各地の近代学校設立に主体的に関わったのは主に地域の名望家層であった。本論文は、社会秩序が大きく変容する幕末維新时期、地域名望家層が、近世に培ってきた社会的な能力に基づき、近代に向けた「開化」の諸事業に積極的に関わり、なかでも近代学校設立を主体的に担った多様な姿とその意味を、膨大な一次史料を駆使して実証的に解明した労作である。近世を組み込んだ近代教育史研究は、その必要性は認識されながら、これまで成功した例はほとんどなかった。このなかで本論文は、「地域名望家層」と名づけた社会的中間層とその「媒介者の素養」を独自の視座として設定することによって、近世後期から明治半ばの民権期までの地域の教育をめぐる動態史を、一貫した視点と方法によって描出することに成功している。その点の学術的価値は際だって高い。

さらに以下の点が、本論文の達成した学術的成果として認められる。

1、これまで、「中央」に対する「地方」という図式のもと、国家の教育政策が地方においていかに受容され具体化されたのか、もしくはいかにそれに対抗したのかとして、近代教育史がとらえられることが多かった。それに対して本論文は、「地方」ではなく「地域」からの教育史像の構築を目指している点で創見が見られる。対象地域は旧松本藩（のち松本県―筑摩県―長野県）の糸魚川街道沿いの町村で、そこに生きた地域秩序を主導する中間層に視点を据え、近世中期から民権期の明治中期までを一貫して、地域に即した教育史像を提示している。なかでも近世以来の大庄屋の名望を維持した栗林球三の他に、大庄屋分家の藤森寿平、城下町名主兼商人の市川量造ら、異なる出自の彼らが、身につけた媒介者の素養によっていかに教育や開化事業に関わり、さらに民権期にそれぞれがどのように分化していったのか、その動態が豊富な一次史料を駆使して、具体的にリアリティをもって解明されている。確度の高い「地域教育史」の出現といえ、学術的価値は高いと評価できる。

2、本論文が独自に設定した「媒介者の素養」という分析概念は、変容する社会秩序のなかで地域名望家層の生き残りを賭けた力量ととらえられている。つまり地域社会を主導、統制していく力の源泉を、地域社会の内と外との境界において知識や情報を統制する力量に求め、それがまた地域社会の現実を創り出していく力と想定されている。地域名望家層を一種のメディアととらえる本論文の視点が、近世から近代を一貫して見通した教育史像を描くことを可能にした。その意味で、一定の汎用性のあるこの概念は、本論文の独創性を際だたせていると評価できる。

3、近代学校創設期、学校開設の担い手たち(地域名望家層)の多くは、同時に新聞発行、地域博覧会、病院など多様な開化の事業に関わっていた。本論文は、この事実注目し、その担い手の具体的な動向分析を行い、近代学校が他の開化の諸事業と相互にいかに関わっていたのか実証的に解明した。さらにやがてその諸事業が各分野に分化していき、それにともなって近代学校の持つ意味と機能が明確化し

(続紙 4)

ていく過程を、史料にもとづいて詳細に解明している。このことは、学校とそれを取り巻く教育的諸事象に限ってきたこれまでの教育史研究の枠を越えて、新たな地域教育史像を提示することに成功している。また学校を越えた地域の視点から近代学校を見ることで可能となった成果であり、教育を社会の側から見る「教育の社会史」に視野が開かれていく研究となっている。その分、本論文は、教育史を越えた歴史研究にも広く貢献できるすぐれた研究であると評価できる。

4、本論文の研究は、旧松本藩に生きた名望家の家に残された6000点を越える一次史料の整理と解読の膨大な作業にもとづいている。愚直なまでに一次史料の解読によって解明された確かな事実と、そこから見えてきた確度の高い知見が展開されている。歴史のリアリティを感じさせる、完成度の高い論文と評価できる。

以上、本論文は独創性に満ち、達成した学術成果は少なくないが、審査の過程で以下のような問題点が指摘された。

第一に、分析概念として設定された「媒介者の素養」とは、社会学でいう「社会関係資本」に重なるものとみなすこともできる。こうした社会学的知見の蓄積もふまえながら、こうした分析概念の射程と内実をさらに明確化していくことが望まれること、第二に、本論文で用いる「メディア」の概念に曖昧な側面があるので適切に分節化する必要があること、第三に、地域の動向を注視するあまり、国家・中央政府の地方行政政策や教育政策と地域の名望家層との関係性が具体的に説明されているとはいえず、その分、地域を越えた同時代の各地域の動向との関係が十分に明らかではない、等の指摘があった。

しかしこれらは、近世から近代まで見通した実証的な地域教育史研究という優れた成果に事後的に見いだされ課題にほからならず、いずれも本論文が達成した上記のすぐれた学術的価値を損なうものではないとするのが、審査委員の一致した意見であった。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成25年2月12日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降